

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者を支援するあなたのための情報紙です。



クリスマス会は男だけで料理の準備

特集

輝く男たち

特集◎輝く男たち

- 男性の居場所はみんなの誇り
大橋メンズクラブ(宮城県石巻市) 3
- なんでも話せるっていい
男の定例会(宮城県気仙沼市) 5
- 男性がかかわるサポートセンター
和野っこハウス・エールサポートセンター(岩手県大槌町) 7
- ☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント 8

生きがい仕事⑥

「未来を築く手仕事、おのくん」
スロウ奥松島(宮城県東松島市) 9

まちの仕組み⑤

それぞれが未来に向かう日まで地域の自立をサポート
(宮城県名取市) 10

事例をとおして考えよう!

専門家が話す☆支援のツボ 12

インタビューあの人に会いたい⑤

新たなコミュニティを創造する
特定非営利活動法人NPO ほうらい
副理事長 高荒 弘志さん(福島県福島市) 14

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ 15

MESSAGE サポーターのあなたへ!

場の力④ 女川町復興ふれあい農園(宮城県女川町) 16

広域避難者の暮らしを支え合う情報紙

「つなぐ・つながる・支え合う」vol.3を挟み込みました。
独立行政法人福祉医療機構/平成24年度社会福祉振興助成事業

- ・ 読者の声
- ・ 購読者を募集しています!
- ・ 次号予告
- ・ 編集後記

特集

輝く 男たち

「男は黙って……」

昔、こんなキャッチコピーが流行ったっけ？だけど、

男だって語りたときがある。

思いっきり笑いたいときがある。

集まって盛り上がりたときもある。

今回の特集は「男の居場所」

宮城県石巻市では「健康教室+α」で多くの参加者が集まる

大橋メンズクラブが開催されている。

お酒がなくても男は集まる。少しの工夫で楽しめる。

気仙沼市唐桑地区ではなんでも話せる「男の定例会」が開催される。

楽しく飲んでなんでも語る。

「なんでも話せること」それは絆のカタチ。

岩手県大槌町の「和野っこハウス」「エールサポートセンター」は

仕事をとおした男性の居場所づくり。

役割は男性の生きがい

「居場所があるっていいな」

「男が集って地域が輝く」

男性の居場所づくりは小さな工夫から。





宮城県
石巻市

ここで初めて出会う人も多くいる

男性の居場所はみんなの誇り

◎大橋メンズクラブ（宮城県石巻市）

男性の集い

石巻市にある大橋仮設団地の集会所で毎月第3木曜日に開催される大橋メンズクラブには毎回、多くの男性が参加する。大橋仮設団地の住民だけでなく、近くの大橋中央仮設の住民も参加する。「男性はなかなか外に出て集まることがない」という問題の解決を目指している。注目したいのは石巻市健康推進課、石巻市社会福祉協議会（仮設住宅の訪問支援員）、宮城県看護協会、そして仮設住宅の住民が協力してイベントを開催することだ。石巻市の保健師や栄養士による健康教室をメインにしながらも、多くの人が集まる場をさまざまな人の協力のもとでつくり出している。

健康教室 + α

きっかけは、石巻市の健康推進課の担当者から仮設住宅の集会所で健康教室を開きたいという話を石巻市社会福祉協議会が受けたことだ。「せっかく健康教室を行政が開いてくれるので

あれば、たくさんの方が集まる場所にしたいと訪問支援員の間で話が盛り上がった」と復興コーディネーターの青沼敬次郎さんは立ち上がりを振り返る。

高齢者が多い仮設団地なので、もともと健康維持や体力づくりへの住民の関心は高かったが、日頃から男性の居場所への課題を感じていた健康推進課担当者と訪問支援員の「健康教室に何か興味をひく内容を加えて男性が集まりやすい場をつくりたい」という思いが一致し、教室のなかに「お酒とうまくつき合うためには」というテーマを入れ、お酒にまつわる話などをすることにした。

2012年7月26日に第1回目の大橋メンズクラブが開催され、その後も毎回30人ほどの参加者がある。大橋仮設団地の入居者はさまざまな地域から入居しているのですが、この場ではじめて会う人たちも多いという。そこには友だち同士、知り合い同士にならないように座席を分け、新たな出会いの場づくりにつなげようとする訪問支援員の工夫



メンズクラブの参加者 佐藤 善男さん

「男性が集まれる場所はあるがたい！」

がみられる。

内容は、前半に健康推進課の栄養士による健康講話を聞き、休憩後の後半は、お酒に合う簡単なつまみづくりを行う。「健康とお酒」がテーマにあることで男性にとって身近な話に感じられるようだ。参加者のひとり佐藤善男さんは、大橋メンズクラブへの想いを「男性だけでは外に出る機会も少ないし、きっかけもない。話をするにも共通の話題もない。健康とお酒がテーマであれば、男性だれもがなにかしら話ができる。このような機会はあるがたい」と話す。

「お酒と健康」という男性にとって共通の話題が、大橋メンズクラブに男性を集わせる要因となっているのだ。

訪問支援員と住民の絆のカタチ

大橋メンズクラブに毎回、多くの男性が集うのは、訪問支援員と住民の信頼関係がうまく構築できたからだ。大橋メンズクラブ開催の広報も支援員が個別に訪



大橋仮設団地の訪問支援員のみなさん

問して呼びかける。「支援員さんが誘ってくれるなら参加してみようかな」と参加して来る人も多い。「訪問支援員をきっかけとしてメンズクラブに参加してきた人であっても、新しいつながりをつくってもらえれば」と青沼さんは話す。大橋メンズクラブが立ち上げられたことは、訪問支援員の日々の活動の成果であり、それが支援員の誇りにもなっている。宮城県サポートセンター支援事務所が実施している宮城県被災者支援従事者研修(15頁参照)内で行われるワークショップ・ワールドカフェの「支援員の活動をおしえてうれしかったことはなんですか?」という質問に対して、多くの訪問支援員が

「大橋メンズクラブが立ち上がったこと」と答えている。大橋メンズクラブは住民に楽しみを提供するだけでなく、訪問支援員の心のよりどころにもなっている。

大橋メンズクラブのこれから

石巻市主催の健康教室がきっかけとなり、石巻市健康推進課と石巻市社会福祉協議会、宮城県看護協会が運営をしていた大橋メンズクラブだが、9月に開催された第3回大橋メンズクラブからは企画運営に大橋仮設団地の自治会も加わっている。月に一度のミーティングでは「次の健康講話のテーマをどうするか」など、

住民に提案してもらった。第6回目は大橋メンズクラブの主催により、クリスマス会を開催した。「少しずつ大橋メンズクラブの企画運営が住民主体に移行できるようにサポートしていきたい」と訪問支援員たちは意気込む。大橋メンズクラブの成功は、さまざまな人が協働したことだけでなく、「なんでもやってみよう」という向上心も要因となっている。昼休みには支援員で集まり運動したり、情報交換をするなど、日々の雰囲気は訪問支援員の向上心を高めている。

大橋メンズクラブのような、住民、行政、市社協(訪問支援員)が協働する取り組みは石巻市内の仮設住宅ではまだ行われていない。石巻市内での仮設住宅の先駆的な事例として、ほかの仮設住宅にも広まるのが訪問支援員の願いだ。

さまざまな立場の人が協働、誇りをもって行う大橋メンズクラブの活動は、石巻市内のほかのサロン活動を盛り上げていく。**竹**



たくさんの男性が参加している



定例会前の集合写真

なんでも話せるっていい

◎男の定例会(宮城県気仙沼市)



宮城県
気仙沼市

男性だけの集まり

夜7時過ぎ、宮城県気仙沼市唐桑町に建てられた仮設住宅、福祉の里住宅Aの集会所に笑い声が響き渡る。集会所に居るのは、みな男性。毎月1回行われる「男の定例会」の真つ最中だ。一列に並べられた長机の上には魚料理を中心とした酒の肴が机いっぱい広がる。お酒を飲みながら、男性だけの会合が始まった。

料理もチラシも手づくり

「仮設住宅の新年会をしたときにビールが余ってさ、男たちで飲んでしまおうって話したのが始まりなんだ」と話すのは、福祉の里住宅親睦会の自治会長である坪内正一さん。記念すべき第1回目の定例会は2012年6月に行われた。参加者は14人。昔のころ、今の生活のことなど、ざっくばらんに話しながら男性だけの飲み会をおおいに楽しんだ。「仮設住宅の部屋のなかだと狭いから酔っぱらってゴロンと横になることもできないしさ。

女性がいると『そろそろ飲むのをやめたほうがいいんじゃない?』と止められちゃってあんまり飲めないし。男だけっていうのは本当に気楽で楽しい。1回目が終わってすぐに、次もやるうって話が出たんだ」と坪内さんは声を弾ませる。

定例会への参加を呼びかけるチラシも作成した。「最初はチラシなんかつくれないと思ってたけど、サポートセンターのセンター長さんにやり方を教えてもらってさ。パソコンでつくっているんだ」と、坪内さん。定例会に参加していた唐桑地区サポートセンターの長尾の軍司智之さんは、「みなさんパワフルですよ。いつも元気をもらっているんです」と笑いながら話す。

毎回、500円の会費で行われる定例会。「はじめに集めないと、酔っ払ってわかんなくなるからさ」と、一人、また一人と参加者が集まるたび「はいっ! 会費!」と男性たちの威勢のいい声が響く。なかには「今日はこれ持ってきたから」と差し入れを持ってく

福祉の里住宅親睦会の自治会長 坪内 正一さん

「みんなで集まって笑い合って、
なんでも話せるっていいだろう？」



る人も。「この辺は周りが海だからさ。定置網をやっている人がその日採れたものを持ってきてくれたりするんだ」と坪内さん。そういった持ち寄りも多いのだという。だからこれだけの豪華な料理がそろうのかと納得していると、「最初の1、2回はピーナッツときさいかだけだったんだよ。3回目からコック長さんが来てくれたから料理が豪華になったんだ」という声。コック長さんと呼ばれた館脇正さんは、もともとの仕事は長距離ドライバー。定例会では、得意な料理の腕を活かし、みんなが持ち寄った素材の味を引き立たせている。男性だけが集まり、男性の手によってつくられた、とっておきの定例会だ。

アイディアの秘訣はみんな で飲むこと

「飲んでいるといろんなアイディアが出るからね」と、館脇さん。奥さんから、仮設住宅のゴミ置き場にカラスが集まり、ゴミを散乱させるので困っている、と

いう話を聞いたと定例会でつぶやいた。仮設住宅に設置されたゴミ置き場は、箱のような囲いにネットがかけただけだった。話し合うなかで、カラスのいたずらだけでなく、冬になると雪がゴミ置き場に出したゴミ袋の上に降り積もり、業者の人がゴミの収集がたいへんになるのではないかという意見も出た。そこで思いついたのが新たなゴミ置き場づくり。5日間かけて、屋根付きの立派なゴミ置き場を完成させた。



みんなで作ったゴミ置き場

てつていうのはないしき。なかなか思っていることをいう機会もない。だからこの月1回の定例会で、集まって飲んで、気楽に話すなかで、それぞれが感じていたことが出るんだよね」と、館脇さん。「騒いでるときは真面目な話をするときがあるんだよ」とも話す。

楽しく飲んで、時折、真面目な話。気兼ねなく、みんなで盛り上げられる場だからこそ、いろいろな意見も出やすく、感じていたことを打ち明けられる場所になっていくのだ。

陽気な話し声が続く男の定例会。男性たちの表情は生きいきとし、輝いている。みなあふれんばかりの笑顔だ。取材の帰り際、坪内さんは定例会について次のように語った。「ただ飲んでただ話しているだけだよ。でもこうやってみんなで集まって笑い合って、なんでも話せるっていいだろう？」



語り合う男性たち



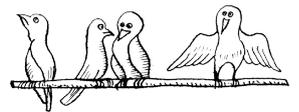
豪華な酒の肴が並ぶ



楽しい話とおいしい料理に自然とほおが緩む



岩手県
大槌町



男性がかかわるサポートセンター

◎和野っこハウス・エールサポートセンター（岩手県大槌町）

Writer 元持幸子

木工の技術を活かした サロンでの交流

岩手県大槌町にある3つのサポートセンターのうちの1つ、「和野っこハウス」は、約500世帯の仮設住宅の敷地内にあり、大槌町社会福祉協議会が運営している。開所から1年が経過し、手芸やカラオケ、料理と、さまざまなサークル活動が行われ、多くの人が集まる場となっている。サポートセンターの入り口では、地域の住民が手がけた手工芸品を販売しており、他県からの訪問者やボランティアへのお土産として直売や商品の発注を受けている。

その商品のなかに、特産物などを表現した木製のキーホルダーが並んでいる。作成者は、和野っこハウスの近くにある仮設住宅で暮らす三浦久さんだ。キーホルダーをつくり始めたきっかけは、支援物資で彫刻刀をもらったこと。震災前は、趣味でお祭りの神楽の頭や木彫りの置物、仏像をつくっていたが、津波によりすべての作品や道具

がなくなつた。仮設住宅での生活の時間が始まつたとき、周辺にある木材と彫刻刀が結びついた。

「作品をつくっていると、きほ、なんにも考えず、没頭できる」と、三浦さん。生活環境の変化のなか、作業の間は自分の居場所や時間をつくりだせるのだ。妻のセツさんとサポートセンターの職員から、サポートセンターで販売してみてもどうかと話を受け、販売もスタート。サポートセンター職員が小物デザインのアイディアや値段などの相談にも乗ってくれ、新たな作品に取り組んでいく、よきチームとなっている。

今は、楽しく作業に没頭できる時間と、自分の作品がよるこばれている反応が聞けることがうれしいと笑顔で話す三浦さん。「もう少し作業場が大きくなつたら、木彫りの置物などもつくってみたい」と抱負を語る。

農園の活動の広がり

エールサポートセンターは、医療法人あかね会が大



和野っこハウス入り口



三浦さんの作品



エールサポートセンターの畑

植町で運営するサポートセンター。センターの正面にある畑には、豆や大根、キャベツ、スイカなど、1年をとおして収穫できる野菜や果物を植えている。

畑ができたきっかけは、震災後、サポートセンター職員となった佐々木薫さんが、サポートセンターを利用する人たちの楽しみのため、農家の小石進さんにアドバイスを求めたことである。震災後、仮設住宅でひとり暮らしとなった小石さんは、男性が外に出る機会をつくろうと、畑や草刈り、餅つき大会など身体を動かしたり、集まって食事をする機会を考えていた。

収穫された野菜は、サポートセンターが行っている介護保険制度外サービスの昼食の一品となったり、行事などで周囲の住民にふるまい、よろこばれている。小石さんは、畑の手入れ方法を教えたりと、頼りにされている存在だ。野菜の収穫を、地域の人たちやスタッフとともによこるこべることがなによりこのサポートセンターに来る楽しみの一つになっていると小石さんは話

す。
小石さんと佐々木さん、同世代の男同士のコンビは今日も奮闘中だ。

二つの居場所の共通点

サポートセンターで見られた男性の活躍のきっかけは、技術を活かせる、社会的役割への関与、地域自治などへも反映する事柄などが挙げられた。

新たに暮らしを組み立てる環境においては、サポートセンターがその人を含む地域がもつ技術や力を発揮できる環境やチャンスを見出せる一つの仕組みなのかもしれない。サポートセンターが、周囲に開かれ、さらに町内から全国へとつながる窓口を担っていることで、より多くのチャンスや活動の幅が生まれると感じる。



小石さんと畑

専門家に聞く地域づくりのヒント

男の居場所から見えてきたこと



東北福祉大学総合福祉学部 教授

高橋 誠一 (たかはし・せいいち) さん

ケアマネジメントの試行研究のあと、宅老所、グループホーム、ユニットケア、小規模多機能型居宅介護などの小規模ケアを研究するなかで、認知症介護やターミナルケアにも関心をもつようになる。NPO 法人のぞみ会理事 (栃木県)、NPO 法人全国コミュニティライフサポートセンター理事、社会福祉法人つどいの家評議員 (仙台市) などを務める。

このような事例が全体としてどれほどあるのかはわかりませんが、探せばけっこう見つかるものですね。記事から、参加している男性が生きいきと活動しておられる様子がよく伝わってきます。地域のなかでは、男性はなかなか外へ出て来ず、ひきこもりがち、と言われますが、役職をもって地域で活躍している男性は少なからずいます。やはり、役割やお誘いがないと出にくいのが男性の心理でしょうか。

以前、ある島で高齢者の地域交流について調べたとき、女性は比較的日中よく出かけていることがわかりました。特に、ひとり暮らしの女性は、夫婦世帯をよく訪れるようです。奥さんがいると、遊びに来る人もいます。男性は仕事をしているときは、それなりに社会とのつながりがあります。生まれ育った地域なので、お互いに知らないということはありません。ですから、地域との直接の交流が少なくても、奥さんが地域とつながっていれば、間接的に地域社会とつながっていました。ところが、男性が一人になると、遊びに来る人も少なくなってしまう、出かけないこと＝地域からの孤立となってしまうようでした。

男性には、本音と建前があって、大義名分があると行動しやすくなるように思います。大義名分というと大げさですが、要はきっかけです。本音では仲間を求めているのではないのでしょうか。

①大橋メンズクラブ

「大橋メンズクラブ」では、訪問支援員との信頼関係が底流にあって、健康づくり教室というきっかけが仲間づくりにつながっていったのだと思います。また、この成功が訪問支援員のやりがいにもつながっています。

②男の定例会

男性が集まるきっかけといえば、飲み会ということになりますが、「男の定例会」では、男性自らきっかけをつくったのですが、それを実現していくうえで、サポートセンターの役割はさりげないけれども、大きいものがあったと思います。ちょっとした支援が大きく歯車を動かしていくものです。

③和野っこハウス・エールサポートセンター

男性にとって仕事生きがいになることは多いと思いますが、仕事づくりも兼ねた地域活動の展開をこの事例に見ることができます。有効に活用できる場所があることも重要だと思います。

これらの事例から、集まりができると、参加者が自信をつけていく。自信がつくと、将来へ向けた発想も湧いてきて、それぞれがもっている力を引き出していく機会になるのだということがわかりました。

無料

発行：2013年2月20日
発行：全国コミュニティライフサポートセンター（CLC）
〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16番30号 シンエイ木町ビル1F
TEL: 022-727-8730 FAX: 022-727-8737 johoc@clc-japan.com

全国に避難した約32万人の暮らしを支え合う

2011年3月11日に発災した東日本大震災と福島原発事故により、全国47都道府県、1200以上の市区町村に、32万1433人が避難または転居しています。そのうち、自県外に避難している人の数は、福島県から5万7954人、宮城県から8079人、岩手県から1674人です（2012年12月6日復興庁発表）。このまま定住するのか、故郷に戻るのか、心が揺れている人も多くいます。

暮らし、支え合う取り組みを紙面で紹介するとともに、全国の支援者が交流して手をつなぐための媒体として、この情報紙をご活用ください。

都道府県別の避難者等の数

(2012年12月6日復興庁発表、単位：人)

北海道	2,981	関東	34,086
東北		東海・北陸	2,898
青森県	1,198	近畿	4,215
岩手県	41,626	中国	1,967
宮城県	112,008	四国	536
秋田県	1,307	九州・沖縄	3,484
山形県	10,693		
福島県	98,235		
新潟県	6,149	合計	321,433

(11月7日発表数と比べ-3,425)

REPORT

東日本大震災における 広域避難者・支援者交流会 in 山形



2012年12月14日、山形県山形市の山形テルサで「東日本大震災における広域避難者・支援者交流会 in 山形」を開催した。福島第一原発事故の影響で山形へ避難した人や支援団体など約30人が参加した。

はじめに、宮城県の仙台市社会福祉協議会中核支えあいセンター所長の庄子健一さんが、仙台市内の借上げ民間賃貸住宅（みなし仮設）の現状と課題について報告。避難者、被災者としてではなく、地域で生活する一員として地域コミュニティに参加していくことへの支援の必要性が述べられた。

続くシンポジウムでは、「山形避難者母の会」代表の中村美紀さん、自身も浪江町出身で山形市へ避難し現在は山形県へ避難する町民を支援する浪江町復興支援員の天野静江さん、避難者の生活相談支援にあたる山形市社会福祉協議会の結城英彰さん、ネットワークを活かし被災者・避難者を支援する特定非営利活動法人きらりよしじまネットワーク事務局長の高橋由和さんが登壇し、支援者・避難者それぞれの思いや課題を共有した。避難者からは「山形で長期間暮らそうとしている人、福島に戻ることを考えている人など、考えはさまざま。個々に合わせた支援が求められている」との意見があった。支援者からは「寄り添いながら避難者の自立を支えていきたい」という意見が述べられた。

最後に、コーディネートした山形県社会福祉協議会地域福祉部地域福祉係長の渡邊陽さんが、避難者の実態やニーズと支援者の想いのバクトルを合わせるためにも、さまざまな立場の人たちが交流でき、意見を交換する場が今後さらに必要になると締めくくった。



山形県
山形市



太陽の家は

人のやさしさでできた家

自然にもやさしい家

2012年7月、東日本大震災によって被災した親子の暮らしを支援するための復興共生住宅として、「手のひらに太陽の家」は完成した。建設したのは宮城県栗原市で活動する、NPO法人日本の森バイオマスネットワーク。ペレット燃料や国産材の普及に取り組みながら、山も人も地域も元気になる社会を目指して活動して



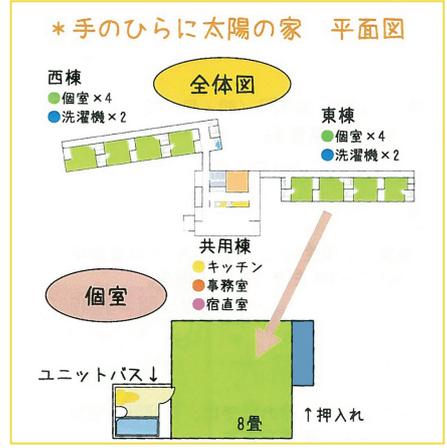
あたたかみのある建物

◎手のひらに太陽の家（宮城県登米市）

いる団体だ。東日本大震災後、被災地での支援活動を行うなかで、「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」と出会い、放射線被害から避難する親子を受け入れる共同住宅の必要性を痛感。建物には自然素材を使用し、木質ペレット燃料や太陽光パネルを活用するなど、自然エネルギーの利用にこだわって建てられた。これまでに延べ78家族、247人が手のひらに太陽の家を利用して（2013年1月31日）。

悩みを打ち明けられる人ができた

手のひらに太陽の家は、朝・昼・晩の食事付きで1人1日千円、未就学児は無料で利用できる。8部屋の個室があるほか、共用の食堂・リビングスペースでは、同じ日に宿泊した子ども同士、親同士で会話を楽しむ姿も見られる。手のひらに太陽の家で出会ったお母さんたちが友だちになり、また同じ時期に来ようねと、地元に戻ったあとも連絡し合い、再び一緒に訪れ



手のひらに太陽の家 平面図

ることもあるという。子どもたちが寝静まったあと、リビングにお母さんたちが集まり、おしゃべり。楽しい話だけでなく、ふだんなかなか言えない悩みや生活の不安を打ち明け、共感し合う場にもなっている。同じ気持ちで集まった人だからこそ、安心して思いを吐き出し合えるのだ。

安全性を重視

利用者は、「子どもには少しでも線量の低いところでのびのび遊んでほしい」と、リピーターが多い。「ここを訪れる人たちは安全性を一番に考えているので、線量は毎日測っています」と話すのは、所長の細木典子さん。線量は震災前と変わらない値で0.03〜0.05だという。細木さんは「せっかく来てくださったんだもの、安

心して過ごしてほしい」と語る。宿泊した小学生が、夏休みの宿題として手のひらに太陽の家での生活を書いた作文を見せていた。文中に書かれていた一言から、手のひらに太陽の家が、子どもたちにとって、本当にあたたかな、心が安らかになる場所であったことが伝わった。手紙にはこう書かれている。太陽の家は人のやさしさでできた家。 音

子どもたちが描いた絵やメッセージが飾られている



DATA

手のひらに太陽の家
〒987-0702
宮城県登米市登米町寺池辺室山 17-1
TEL : 0220-23-9755
FAX : 0220-23-9756
MAIL : info@taiyounoie.org
HP : http://taiyounoie.org/



兵庫県
神戸市

避難したからこそ生まれた 問題を解決する支援

◎避難サポートひょうご(兵庫県)

現在、兵庫県で千人を超える人が避難生活を送っている。「避難サポートひょうご」は、避難者の現状を知り、その声に耳を傾け、どのように応援することができ、のか、知恵を寄せ合い、支援の輪を広げるゆるやかなネットワークである。

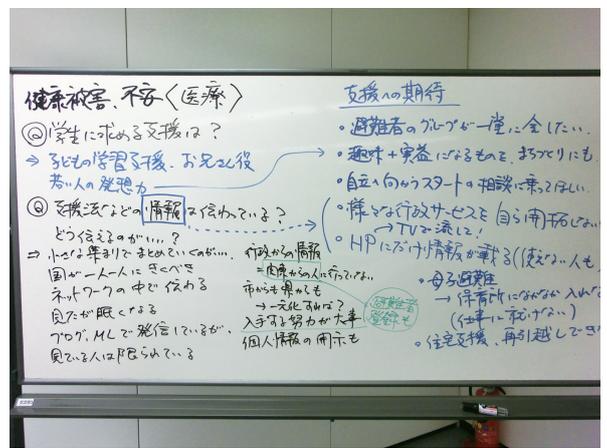
認定NPO法人市民活動センター神戸、NPO法人宝塚NPOセンター、兵庫県社会福祉協議会、兵庫県弁護士会(有志)が世話人となり、2012年8月から勉強会を開催。11月17日には、宝塚市で3回目の勉強会が行われ、避難者のセルフヘルプグループの座談会と意見交換が行われた。県市行政・社協、NPOやボランティアグループなど30を超える団体がつながり、回を重ねるたびに賛同する仲間が増えている。



会場の様子

催する「おひさまカフェ」、篠山市で移住・定住の手助けを行う「こつからネット」、西宮市で交流会や支援物資の提供、物販活動を行う「ぶらっとホーム」、神戸市で人気ケーキショップとコラボしてつくったロールケーキ「ベっこロール」の販売を通じ、避難者の自立を支援する「ベっこZANA」の取り組みが報告され、右も左もわからない避難先で同じ境遇の人とつながり、当事者が声

をあげ、具体的な支援を求めることの重要性が話された。
コーディネーターの古部真由美さん(東日本大震災県外避難者西日本連絡会・まるつと西日本)は、2011年11月に避難者の会を発足させ、避難者向けにメールニュースを発行している。「仕事をしているため、活動時間は週末や夜。伝えるべき情報は途切れることなくあるが、数人いた編集スタッフは就職して減っていくばかり。避難者が避難者を支援する取り組みは、人・場所・お金がないと維持ができない」と、5グループ共通の課題を整理した。
その後、意見交換が活発に行われ、早急に求められる支援として、



話題にのぼったことを板書

セルフサポートグループの運営支援、避難者への情報の一元化と情報発信方法の多様化、避難者が現状や意見を発信しソーシャルアクションできる場の支援、避難者の自立支援があげられた。
今後、これらのために各々ができること、具体的支援を持ち寄り、実際の支援に動き出す。

世話人の市民活動センター神戸理事・事務局長、実吉威(つよし)さんは、『避難サポートひょうご』という名の活動団体があるわけではない。勉強会・集会のこの場と参加者が『避難サポートひょうご』そのものの。一つひとつの団体が行えることには限界がある。どんどん増える新たな仲間と新たな支援を生み出していきたい」と話す。松



避難サポートひょうご
事務局：認定NPO法人 市民活動センター神戸 (KEC)
〒650-0022 兵庫県神戸市中央区元町通 6-7-9
TEL 078-367-3336
<http://www.kobekec.net/>



福島県
会津美里町

そっと手を差しのべる支援

◎サポートみさと（福島県会津美里町）

新たな生活をサポート

福島県会津美里町では、震災当日に会津美里町災害対策本部を設置。2011年3月14日より避難者の受け入れが開始され、姉妹友好都市である福島県楢葉町の住民を中心に、最大で1078人が会津美里町での生活を送った。

同年3月23日には、行政が会津美里町災害ボランティアセンターを設置。炊き出しや物資の受け入



入り口の前の掲示板には、誰でも情報が得られるよう、さまざまなお知らせが並ぶ

れ、ボランティアのコーディネーター、情報発信のための広報紙作成など、さまざまな活動を行ってきた。その運営を担ったのが、会津美里町が設置した町民活動支援センター準備室「サポートみさと」だ。同年9月末日にボランティアセンターは閉鎖となったが、閉鎖後もなお、継続して避難者への支援を行っている。

つながりという役割

「私たちの役目は、つながりこと。避難してきた人たちが少しでも落ちついた生活ができるように、人と人や、人と情報をつなげる、といった活動をしています」と話すのは、サポートみさとの安達忍さん。サポートみさとの「つながり」活動は多くの避難者の心をそっと支えている。

双方の住民をつなぐ

会津美里町に避難してきた楢葉町と、会津美里町の共同の活動が

ある。それが「にこまるクッキープロジェクト」だ。2011年5月に、料理研究家の枝元なほみさんが会津美里町を訪れ、料理をすることで、少しでも不安な気持ちに落ち着いたら」と、ニコちゃんマークのようにかたどられたクッキーをみんなで作ろうという企画を提案。その想いに賛同したサポートみさとでは、枝元さんとともに仮設住宅へ声かけを行った。1回目の「にこまるクッキーづくり」に集まったのは30人以上。つくりながらの会話が弾み、クッキーだけでなく、参加者の顔にももちろん笑顔があふれた。現在は

会津美里町在住のパティシエと楢葉町の女性2人が中心となり、被災地と消費者を結ぶささやかな手仕事として、販売用のケーキづくりへと発展している。

集まる場は一つだけではない。楢葉町社会福祉協議会が運営するサロン活動にもサポートみさととはかわっており、そこでも重要なパイプ役となっていた。月に1回、イベントのようなものを行いたいと楢葉町社協から申し出を受け、始めたのが会津美里町の住民が講師となるイベントだ。これまで、高田梅漬け、自然教室、中国茶講座などが行われた。サポートみさとから講師依頼の声をかけること

もあるが、活動を知った住民から声がかかることのほうが多いという。個々の住民やグループの特技を活かしたイベントは、好評を得ており、講師となる住民も、教えることでスキルアップにつながったり、誰かのために活動ができる、というやりがいになっている。このイベントをきっかけに、双方の交流も生まれており、イベントがない日でも一緒にお茶飲みをするなど、新たなつき合いも始まっている。

サポートみさとがつなぐ役目となり、住民同士が出会い、交流が生まれ、かわりが始まるという、自然な形の支え合いの芽が育ち始めているように感じられる。表立って支援するのではない、住民たちの思いにさりげなく手を差し伸べる支援が重要な役割を担っていた。**官**



サポートみさと
〒969-6264
福島県会津美里町字高田甲2905-1
会津美里町公民館1F
TEL：0242-85-7634
FAX：0242-85-7635





宮城県
東松島市

未来を築く手仕事、 おのくん

スロウ奥松島（宮城県東松島市）

スロウ奥松島は宮城県東松島市小野駅前応急仮設住宅に集い、手仕事を行うお母さんたちのグループだ。慣れない細かな作業に当初、お母さんたちは「めんどくしえ」とつぶやきながら、ソックモンキーをつかった。そこで、小野駅前応急仮設住宅とかけて、「めんどくしえおのくん」と名づけられた。現在は「おのくん」と親しみを込めて呼ばれている。仮設住宅の集会所には毎日、お母さんたちがおのくんをつくるために集まる。

ソックモンキーは、アメリカの貧しい労働階級のお母さんが、子どもにプレゼントをするために、お父さんの靴下を改良したものだ。東松島市に支援に訪れた人がつくり方を教え、そのかわいさにほれ込んだ小野地区のお母さんたちが、おのくんを一つひとつ手縫いでいる。

「はじめは自転車操業で、注文された分だけつくって、その売り上げで新しい材料を買って……の繰り返しでした」と自治会長の武田文子さんは話す。「そもそも売ることなんか考えていないで、ボランティアに来てくれた人たちにあげようと思ってつくっていた」そんなおのくんが、全国から注文が来るようになった。今は、おのくんが東松島市の復興をアピールしようと商標登録も済ませた。

☆今月の読者プレゼント！
抽選で一人に、おのくんをプレゼント。お名前・ご住所・TELを明記のうえ、本紙への感想・ご意見をお書き添えいただき、本紙16頁の宛て先まで、ハガキ、FAX、メールのいずれかでお申込みください。締め切りは3月20日です（当選発表は発送をもってかえさせていただきます）。



復興への想いが込められたおのくん



代表の武田文子さん



「めんどくしえ」とつぶやきながら作業は進む



一つひとつ丁寧に縫い上げる



おのくんには縫う人の個性が出る



スロウ奥松島

〒981-0301
宮城県東松島市牛網字小野駅前
2-33-1
TEL:080-5561-3612



まちの仕組み

宮城県名取市

5

それぞれが未来に向かう日まで

地域の自立をサポート

宮城県名取市



宮城県
名取市

支援体制の分担

宮城県名取市は、東日本大震災によって、死者911人・行方不明者42人、半壊以上の建物5千棟以上という甚大な被害を受けた。被災した住民たちの支援を円滑に行うため、名取市では、保健関係機関・地域の支援組織や名取市社会福祉協議会からなる「名取市被災者支援連絡会」を月1回開催している。

現在の支援体制は、プレハブ仮設住宅に暮らす住民の支援を名取市社会福祉協議会が名取市から委託を受けて運営するなとり復興支援センターひよりが担い、借上げ民間賃貸住宅（みなし仮設住宅）や在宅で暮らす住民の支援を、名取市が運営するサポートセンターどっと・なとりが中心に行うといった、役割分担がされている。

スタッフのケアも

プレハブ仮設住宅の住民への支援を行っている、なとり復興支援センターひより。名取市内にある7か所の仮設住宅と雇用促進住宅に生活支援相談員が、1人ないし2人常駐する形で活動を行っている。常駐にした理由の一つに、自治会の負担軽減がある。「住民同士の課題解決だけでなく、支援団体の調整など、自治会だけでやろうと思うとたいへんになるのではないかと感じ、こうした形をとったんです」と、センター長の今野三幸さん。長く親身にかかわり続けていることで、自治会からの信頼も厚く、自治会主催のサロン活動の相談をされることもある。

また、常駐で活動する生活支援相談員たちのサポートも忘れてはいない。毎月

第1、2水曜日にスタッフ全員でケース検討会議が行われている。生活支援相談員から、自分たちも話し合える場がほしいと要望があり、始まったものだ。日頃の悩みや疑問を共有できる、貴重な時間だ。「話し合いだけでなく、勉強会をしたりと、そのときの必要性に合わせて形を変えながら実施しています」と、復興支援コーディネーターの中山国彦さん。みやぎ心のケアセンターのスタッフも参加しており、生活支援相談員のケアにも余念がない。これからの活動について今野さんは、「復興公営住宅もこれから建設・入居となるだろうが、仮設住宅を出たら支援が終わりとは思わない。見守り続ける体制を考えていきたい」と、今後の展望を見つめる。



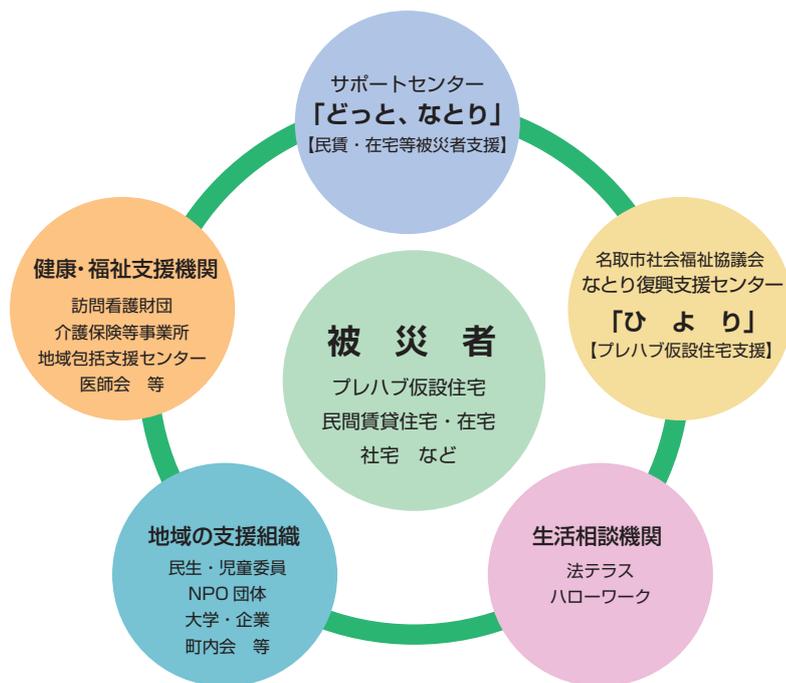
仮設住宅のイベントにはひよりの生活支援相談員も協力

専門職との連携

サポートセンターどっと・なとりの活動は、個別訪問とサロンの開催の二つ。個別訪問は、借り上げ

民間賃貸住宅と名取市内の在宅で暮らす住民、名取市近郊に避難し、生活する住民を対象として行っている。特徴的なのは、宮城県仙台市にあるみやぎ心のケ

名取市の被災者生活支援体制図



公益社団法人青年海外協力協会のメンバー。
右端が医療・福祉担当コーディネーターの福永麻紀さん

アセンターのスタッフと同行訪問をしている点だ。甚大な被害があった災害。訪問するなかで、今も心に傷を抱えている人は多くいる。心のケアという面で訪問に専門職の人たちがかわわってくれることは、住民にとっても、サポートセンターのスタッフにとっても安心につながる。

地域に根づく常設サロン

もう一つの取り組みであるサロン活動は、2012年10月より、名取市内と仙台市の5か所に常設の拠点をかまえ、活動している（取材時は5か所だったが、今後増設予定）。常設サロンの運営は、名取市からどっと・なとりのコミュニティ支援員として委託を受けた、公益社団法人青年海外協力協会（JOCA）のメンバーが担当。各拠点、平日の9時から16時30分まで開放しており、時間内であれば、いつでも誰でも気軽に立ち寄ることができ。借り上げ民間賃貸住宅には、仮設住宅に設けられた集会所のような、集える

場所がない。常設サロンは、地域のみなが集まってお茶を飲んでもいい、ゆつくり話をしてもいい、自由に過ごせる場所として建てられたのだ。訪れた人たちは、「こういう場所がほしかった」「なにかあれば私も手伝うよ」という声が聞かれている。

スタッフとして活躍するのはコミュニティ支援員だけではない。サロンの活動に、地域の住民たちが、有償ボランティアとして加わっている。「実は、スタッフのほとんどが県外の出身なんです。そのため、地域性だったり、これまでの暮らしなどがどうしてもわからない。そういったこともあって、地域の人たちが一緒に取り組んでくれることは本当に心強いです」と話すのは、医療・福祉担当コーディネーターの福永麻紀さん。顔なじみの関係が築きやすいように、スタッフをサロン毎の担当制にしているが、そこに地域の人たちが加わることで、より地域に根ざしたサロンに近づくことができている。

不定期で開催される子育て

てママ向けの講座や料理、体操では、コミュニティ支援員たちがそれぞれの特技を発揮して、内容を決めていく。福永さんは、「今は私たちが企画することがほとんどですが、いつかはここに来る地域のみなさんがやりたいことを実践できるような場にしたい」と話す。これまでも、歌が好きな住民が、みんなで歌いたいと提案し、サロンで歌ったことがあったという。「最終的には、地域の自治組織の形成につながたい」と抱負を語る福永さん。その第一歩として、常設サロンが住民同士をつなげるきっかけとなることを目指す。

震災による被害は人によって違う。また、次のステップに向かうタイミングや気持ちの整理も、人によってさまざまである。決して立ち上がるのはその人自身。今回の取材をとおし、住民たちが自身の力で未来を描く日まで、サポートし続けようという、支援者たちの強い意気込みが感じられた。

昔

事例をとおして考えよう！

宮城県内の被災市町では、被災者の生活を支援するために、各種支援員を設置して、戸別訪問や相談事業、サロンづくりなどを行っています。支援員の多くは、震災で家や職を失った被災者であり、介護や福祉の知識・経験のない人もいます。宮城県が設置した「宮城県サポートセンター支援事務所」が関係機関と共同して、これら支援員対象の研修会を開催しています。期待される役割や個別支援と地域福祉活動の理解を深めることに重点を置いた研修では、基礎知識を学びつつ、グループワークを多用して、毎回さまざまな事例について白熱した話し合いが行われています。

このコーナーでは、毎月、実際に研修で使われている事例を紹介し、受講した支援員たちが事例に対して感じた生の声と、専門家による支援のポイントを掲載していきます。事例をとおし、あなたならどうするか、一緒に考えてみましょう。

【今月の事例】自治会の争い・ひきこもってしまった太郎さん

太郎さんは仮設住宅の自治会長です。被災地には仕事のために単身赴任で来ていましたが、震災で仕事場もアパートも流されました。震災前にも自治会長をしていたこともあり、今回の仮設住宅でもなんとか力になりたいと思っていました。

太郎さんはとても行動力がある人で、仮設住宅に移ってから、課題を次々と見つけ、解決していこうとしました。数か月もすると、満場一致で自治会長に推薦されました。自治会長を引き受けた太郎さんは周囲の人が目を見張る活動をしました。2年目に入ると同じ仮設の副自治会長と意見が合わず、仮設内に派閥ができてしまいました。

とうとう、会議の最中に大ゲンカが始まり、これまで順調に行われていた活動がすべて中止になりました。仮設のなかは半分に割れてしまいました。集会所の活動もなくなってしまう、楽しみにしていた住民も行くところがなくなり、近頃は顔色もよくありません。しかし、周りはどうすることもできませんでした。

Profile



ながさか・みはる
研修講師・永坂美晴

兵庫県明石市望海在宅介護支援センターセンター長
看護師、主任介護支援専門員
阪神・淡路大震災時に仮設住宅の支援に奔走。そこで得たノウハウを地域活動に生かすべく、地域の住民とともに「地域劇」などを開催。東日本大震災の被災地の仮設住宅には兵庫県介護支援専門員協会の支援員の一人としても定期的に訪れている。



今回のキーワードは 「住民の声はどこに？」

永坂美晴さんは、支援員による個別支援の視点を2つに分けました。

一つは人を「多角的にとらえる16の視点」です。この作業は当事者の思いや状況を整理・集約し、関係機関や専門家に直接伝えることです。これは、課題を検討し、解決に向けてともに力を合わせることとなります。紙面では、編集部が8つにまとめたものを掲載します。

もう一つは「人を支える6つのポイント」の提示です。これは支援者がひとりで抱え込んで悩んだり、既存のサービスにつなぐことだけを考えるのではなく、当事者自らの力を引き出そうと試みるものです。これらによって課題を抱えた当事者をより具体的に早く、専門家につなぐことができます（6つのポイントと16の視点は『高齢者援助における相談面接の理論と実践』（渡部律子著・医歯薬出版）を参考にしています）。

見えない気持ちを さぐる ポイント

太郎さんの事例を以下の項目に当てはめて考えてみましょう。全部の項目に当てはめられなくともいいです。思いつくものについて考えてみましょう。そしてあなたが実際に活動をするなかで、同じような場面に遭遇したとき、この項目を思い出してみてください。

7 現在の状態や経過をよく知ろう

- どんなことが原因で、それはいつ頃から始まったのでしょうか。
- その状態はどのくらいの期間続いていますか。
- いつ・どんなことで・どのくらいの頻度で症状が出るのでしょうか。
- 本人やその周りの人たちにどんな影響がありましたか。

★本人の状況をよく知ることから支援は始まります。

8 みんなの気持ちを整理しよう

- 本人は、自身の今の状況について、どのように感じていますか。
- まわりの人たちは、どのようなことを考え、どんな行動をとっていますか。
- あなた自身はご本人の状況をどう考えていますか。

★本人の思いとまわりの思いを照らし合わせることで、どのような支援が必要かが見えてきます。

福祉用語

※エコマップ：本人に関係する人や資源を関係図に表したものの。関係が深ければ太い線、浅ければ細い線でお互いを結ぶ。

4 本人は、なにで一番困っていますか

- 本人の様子から思いあたるものはありますか。本人の言葉で書いてみましょう。
- 本人の発した言葉に SOS のサインが含まれていませんか。
- 家族や近所の人たちからの情報のなかに、鍵になる言葉はありませんでしたか。

★本人や周りにいる人たちのちょっとした言葉や行動から、私たちが見落としていた本人の苦しい思いや望みに気づけるかもしれません。

5 本人の可能性を引き出そう

- 本人の長所はなんですか。
- 本人の能力はなんですか。

★今、表面に現れている姿だけで「問題のある人」と見てしまうのではなく、本人のもつ、今は見えにくくなっているかもしれない、長所や能力を活かすことに目を向けてみましょう。

6 問題に関係する人を考えてみよう

- 問題を起こしている人は誰ですか。
- 問題が起こることで困るのは誰ですか。
- 問題はどんな状況の変化につながりますか。

★問題はどのような状況の変化につながりますか。問題発生の原因を考えることにもつながります。

1 過去の出来ごとに目を向けよう

- 家族や友人、周辺の人など過去にどのような人がかかわっていましたか。
- 過去と現在でなにか変わったことはありますか。

★過去の出来ごとが現在に大きく関連していることがあります。個人を理解するためには、その人の過去とも向き合う必要があります。

2 本人の希望はなんでしょう？

- 本人のどのような悩みが満たされないために、この問題が起こっているのでしょうか。
- もしもあなたが本人の立場ならどんなことを考えますか。
- 本人は援助を望んでいますか。

★同じような出来ごとであっても、人によりとらえ方が違います。

3 多くの資源に目を向けよう

- 本人にどのような問題が降りかかっていますか。
- 問題を解決するためには、どんな方法がありますか。

★既存のもの（行政、システム等）にとらわれるだけではなく、今欠けている部分を補える外部の資源をエコマップに書いてみましょう。支援の可能性は一つだけではないはずです。

専門家が話す★支援のツボ

もう少し広く大きく

永坂 美晴 さん

(明石市望海在宅介護支援センター長)

地域の活動のなかにはいろいろな問題が起こります。特に人のトラブルはかわりにくいものです。まして、トラブルの中心が地域のリーダーとなると、この事例のように地域活動が変わってくる可能性があります。しかし、支援者として考えなければいけないのは「住民の声はどこに？」このことに気持ちを傾けてください。トラブルにみんなの目が向いてしまいがちです。困っているのは、トラブルの当事者だけでなく周囲の住民も同じです。支援者としては、ほかの住民の声を聞くこと、その声を取り入れ、活動につなげることを考えてみませんか。一人ひとりの問題を見つめることと、もう少し広く大きく見ること、そして、住民と一緒に考えることが大切です。

新たなコミュニティを創造する

福島県福島市◎特定非営利活動法人NPO ほうらい

副理事長 高荒 弘志さん

福島県
福島市



DATA
 特定非営利活動法人
 NPO ほうらい
 〒960-1245
 福島県福島市松川町浅川
 字北峯 8
 TEL : 024-548-3131
<http://www.npohourai.com/>



1969年に造成された福島市蓬萊^{ほうらい}団地を中心に、福島市の南部地域を住みよくしようと活動しているのが、2008年に設立された「NPO ほうらい」だ。蓬萊団地に暮らす副理事長の高荒弘志さんは、東日本大震災後さまざまな支援活動を展開。その一つが、仮設住宅と蓬萊ショッピングセンターを循環するコミュニティバスの運行である。

市民が自ら考えて行動する

福島市南部には、原発事故で避難を余儀なくされた飯館村の仮設住宅が6か所点在しているが、車がないと買い物や病院に行けない立地のため、高齢者が困っているという声を聞いた。そこで、病院や銀行が集まっている蓬萊ショッピングセンターと、各仮設住宅をつなぐ循環バス「くるりんバス」を運行しようとしてひらめた。

蓬萊地区でコミュニティバス「くるくるバス」を3年間運行してノウハウのある「蓬萊まちづくりコミュニティゼえね」に2011年度は事業委託し、今年度は「NPO ほうらい」で週2回、火曜と木曜に運行している。各仮設住宅を巡るので、車内で「久しぶりに会えたね」という会話が交わされることも多い。

蓬萊ショッピングセンターにあるバスの待合室は、産直野菜や手芸品、古着などの販売もしており、気軽にお茶が飲める空間だ。また「くるく



仮設住宅とショッピングセンターを循環する「くるりんバス」

るバス」の待合室でもあるため、地元の人たちと出会い、新たなコミュニティの創造につながっている。

また、各仮設住宅へバラバラに入居した飯館村の人たちが、集って楽しい時間を過ごせるようにと、毎週木曜日にカラオケのサロンを開催して喜ばれている。もちろん足は循環バスだ。交通手段の少ない高齢者の閉じこもり予防につながっている。

これからも市民が自ら考えて行動することを大事に活動していきたい。**小**

宮城県サポートセンター支援事務所
〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4
宮城県社会福祉会館3階
TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601

「サポートセンター行脚」

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

前回、サポートセンターの支援活動が行き詰まる背景にマネジメント、コーディネート力の欠如、つまり人材不足を挙げました。地域福祉コーディネーターの育成を待てないならば、在野の優れた人材に力を借りていきたい。そこで今回は、当支援事務所を通じて、女川町や東松島市など被災市町に派遣している専門職を紹介します。

派遣しているのは、社会福祉士を中心とした、日頃から地域に入って活動している人たちです。

七ヶ浜町で毎月開く地域ケア会議のアドバイザーや、法テラス東松島での専門家派遣などでご協力いただいているO.Kさんは、女川町で被災し、危うく難を逃れた人です。成年後見利用に向けた組織の代表としても活躍。彼の丁寧な聞き取りをもとに、支援員や市町・地域包括支援センターなど関係者と連携して支援を進めており、「蒼く静かに燃える男」として、周囲から

信頼が寄せられています。

今後も必要に応じて、地元で活動する社会福祉士などを当支援事務所から派遣していきます。また、借上げ民間賃貸住宅（みなし仮設）への被災者支援の一環として、県保健福祉事務所単位での内陸市町と協調し、交流会や相談会を実施する予定です。その際は、法テラスや心のケアセンターなど専門職と連携した総合相談会も行いたいと考えています。

サポセンの皆さん、今後の支援活動には困難な課題が山積しています。一つひとつを丁寧に解決していく取り組みこそが肝要です。どうかひとりで悩まず、地域で支え合いのネットワークを築きながら、多様な専門職と連携して、広がりのある支援を心がけていきましょう。私たちも微力ながらサポートさせていただきます。

◎宮城県被災者支援従事者研修 ステップアップⅡ研修

基礎研修後、6か月程度の経験のある支援員が対象の研修会です。

- ①【気仙沼会場】 2月26日（火）・27日（水）宮城県気仙沼保健福祉事務所
- ②【石巻会場②】 3月6日（水）・7日（木）石巻市ささえあい総括センター

MESSAGE

サポーターのあなたへ！

支援員からの相談に 浜上さんがお答えします。

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上 章



Q お茶会やふれあいサロンの運営を、住民が自主的に行うようにもっていくにはどうすればよいのでしょうか？

A 仮設住宅や地域で行われているお茶会など、ふれあい交流の場の運営を、これまでは支援員や社協職員、外部支援団体が担っていたところも多いのではないのでしょうか。仮設住宅に入居して間もないときは、被災した人は元気もなく、自分たちで運営することが難しい状況でしたが、時間が経つなかで少しずつ元気になり、自立してきています。もともと被災前は自立して社会生活をされてきた人たちです。そろそろ支援する側が、被災者を“力のある人、できる人”という見方に切り替えていく必要があります。

お茶会の輪のなかに支援員も一緒に入って談笑しながら関係性をつくり、思い切ってこれからのお茶会の企画や会場の準備、運営などについて、参加者に相談してみるのも一つの方法です。企画について「皆さんがしてみたいこと、楽しいことを考えてみてください」と聞いてみたり、準備や運営について「お手伝いいただけることはありません

か？」「どんな運営の仕方がいいですか？」などと投げかけてみてください。全国的に多くの地域では、地域住民が自主運営する多様な「ふれあいサロン」が行われています。してもらうのが当たり前になっているところでは、意識の切り替えに時間がかかるかもしれません。住民の皆さんが自由に考えて、気軽に楽しく、やりやすいように運営していくことを目標にしてみてください。支援員は、運営が一部の人の負担にならないように、また閉鎖的、排他的にならないよう助言したり、住民ができない部分（たとえば、広報チラシの作成など）を側面から支援し、お茶会（ふれあいサロン）がよりよいものになるよう温かく見守っていく役割がよいのではないのでしょうか。

【プロフィール】鳥取県生まれ。兵庫県川西市、兵庫県と大阪府の社会福祉協議会で地域福祉活動の推進や個別支援に携わる。気仙沼市社協災害ボランティアセンターの支援に関わったことが縁で、2012年4月より宮城県サポートセンター支援事務所アドバイザーとして、サポーターの研修等支援にあたっている。



テントにはたくさんの人が集まる

「次はなにを育てようね」
 そんな会話が聞こえる。

「今日は何につくったの？」
 机に広がるのはそれぞれが
 持ち寄ったお野菜。
 農園の横に建てたテントと
 テーブルは、
 ちょよつと一休み♪できる
 集いの場。

野菜の成長を眺めながら、
 お野菜をパクリ。

「次よつと休めるところがほ
 2012年の春には、
 30人ほどが農園づくりにかか
 わり、共同の畑もつくられた。

宮城県女川町の清水仮設住
 宅の近くにある『女川町復興
 ふれあい農園』。2011年
 11月に女川町で高齢者の生活
 基盤調査を行っていた東北福
 祉大学が住民から「畑仕事を
 したい」という声を聞き、農
 園の設置を女川町に提案した
 のが始まりだ。農園の土地は
 女川町が無償で提供。付近に
 暮らす清水および新田地区仮
 設住宅の入居者と東北福祉大
 学の学生で農園の整地や土づ
 くりからスタートした。最初
 は区画を決め、農作物を栽培
 したいという希望者が、それ
 ぞれ自分の畑をもつ仕組みを
 とった。草取りなど、たいへ
 んだけれども、『自分の畑』
 と思うとがんばれる。現在、
 30人ほどが農園づくりにかか
 わり、共同の畑もつくられた。



丹精に育て上げた畑が広がる

☆次号予告 特集「復興公営住宅の暮らしを考える」

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ（地域づくり）から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。みなさまからの率直なご意見が本紙を大きく育てます。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。あわせて、お勧めの取材先などの情報もお寄せください。うちに取材に来てほしい！という方もぜひ！

5号を読んで…

●事例検討のページを研修で使わせてもらっています。
 （山形県・Iさん）

★読者プレゼントの応募はこちらへ！

〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30 1F CLC 読者プレゼント係
 FAX: 022-727-8737 E-mail: johoc@clc-japan.com

編集後記

☆「男性はなかなか外に出ない…」という声を聞くことがあるが、そんなことはない。今回の取材先で見た、男性たちが誇らしい、豪快に笑い合う姿。男性っていいな、そう感じる集まりだった。（菅原）

購読者を募集しています！

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか？
 お知り合いの方へのプレゼントにもご利用ください。

●購読会員 年3,600円（年12回、送料込み）

●支援会員 1口3,600円（年12回、送料込み）

ご指定いただいた先へ、それぞれ年12回お送りします。指定がない場合は、編集部が選定する被災都道府県・市町村の被災者の生活支援担当課、または社会福祉協議会のほか、全国に避難する被災者を支援する都道府県、市町村の被災者の生活支援または社会福祉協議会に送付いたします。

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

＜お振込先＞ ●ゆうちょ銀行振替口座
 口座番号：02260-9-46303
 加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、
 ①お届け先の住所と②何号からの購読申込みか、支援会員の方は③希望する送付先のあて名、または④「指定なし」と記入してください。